

# 話し言葉における 文末「の」の機能

三枝令子

## ◆要旨

いわゆる「ノダ」形式において、「の」で言い終わる形は、「のだ」の異形態とされることが多い。本稿では、「の」は、「のだ」と共通した使われ方もするが、また「のだ」とは異なる働きも持つことを論じた。すなわち、言い切りの「の」の機能は、断定を伴わない体言化の働きによって「事態をひとまとめのものとして把握すること」にある。そのため、行動のプロセスを並べ立てるようなときによく使われる。この場合には、「の」がいわゆる「ノダ」形式の働きをしているとは言えない。文末の「の」は、用言の終止形と並んで、叙述の基本的な形の1つと考えられ、断定が伴わないがため、そのときの話し手の気持ちのあり方、その表れであるイントネーションやストレスによって、疑問や命令、禁止、単に語調を整えるためのとりまとめといった様々な気分を盛り込むことができる。

## ◆キーワード

言い切りの「の」、のだ、じゃないの、  
きっと

## ◆ABSTRACT

This paper discusses the use of the particle “no” in the sentence-end position in spoken Japanese. This type of “no” has the same function as the so-called “noda”. But because the modal part “da” is not used, “no” shows that the sentence is just a simple statement. Therefore it can indicate various modal views, for instance questions, prohibitions, enumeration etc. by intonation, stress and context. So “no” in the sentence-end position is not one type of “noda”, but it has a more essential role similar to the predicate ending in spoken Japanese.

## ◆KEY WORDS

“no”, “noda”, “jyanai no”, “kitto”

## The Function of *no* in Ending Part of Spoken Japanese

REIKO SAEGUSA

## 1 はじめに

動詞の言い切り形は、それ自体ムード性を持つ。発話される文脈とイントネーションによって、たとえば疑問や命令を表すことがある。

- (1) 行く？
- (2) 〈子どもに向かって〉早く食べる！

これは現在時の言い切り形に限ったことではなく、「買った、買った！」「買った？」「買って！」「さあ、帰ったり、帰ったり！」など、他の活用形にも見られ、また、動詞に限らず、「早い？」や、早すぎるという意味での「早い！」など、形容詞にも見られる。渡辺 (1971:373) は、終止形について、名称としては独立形とする方が望ましいとしつつ、「職能的に極めて複雑な構造を有する用言の活用形の中で、素材表示的とも呼ぶべき用法を持つのはこの独立形だけであり、その意味で独立形は、用言の各活用形の中で体言の素材性に等しい性質を有するもの」と述べている。尾上 (2001=1979:105) は、この論を引き継ぎ、「そこに座る」という表現が、なぜある時は命令文になり、また、ある時は肯定判断文になるのかについて、「このように、他への連続、顧慮を絶した叙述内容の独立性をその意義とするゆえに、終止形は肯定判断文の終止にも用いられ」、同時に、終止形に終わる命令文が可能な根拠も、同じ終止形の素材表示的意味にあるとして、「(略) 聞き手の状況認識能力によって、それは聞き手自身に向けられた要求の内容、あるいは聞き手がそこで為すべき行為の指定内容となる。これは、自動車教習所の教官が助手席でぶっきらぼうに「ブレーキ」「アクセル」と指示するのと等しい」と述べている。本稿では、この素材表示性、そしてそこから生ずるムード性の現れは、叙述に「の」が接続した形にも見られるものとする。

## 2 文末の「の」とその周辺

文末の「の」にも、動詞の言い切り形と同様に、次のような疑問や命令の用法がある。

- (3) あなたも行くの？
- (4) ちゃんと食べるの！

この「の」は、準体助詞で、述部に接続することで名詞節を作り、叙述を体言化する。こうしたムード性を帯びた表現は、次のように、他の形式名詞にもいくらか見られる。

- (5) 休むときは前もって連絡すること。
- (6) まあ、きれいだこと！
- (7) そんなこと、知らなかったもん。

しかし、「もの」や「こと」は名詞としての実質を残しており、その用法が限定的で、「の」が持つような用法の広がりはない。従来、この「の」は、「のだ」の異形態と考えられてきた。それは、三上 (1953) のガノ可変の指摘によるところが大きい。三上は、体言では、連体法の内部の主格を「の」に変えることができるが、「のだ」はガノ可変を失っており、一個の準用言(準詞)とみなさなくてはならないとし、「のだ」の「の」を準体助詞とは見ない。すなわち、次の例文 (9) では、「の」の文は成立しない。

- (8) 台風 {の・が} 来た日
- (9) 台風 {\*の・が} 来ているのだ。

本稿では、文末の「の」が、ガノ可変の性質を持たないことは否定しない。文末の「の」は、いわゆる「ノダ」形式の意味で使用することもできる。以下

の文で、「の」の言い切り形を「のだ」にすることも、逆に「のだ」を「の」に言い換えることも可能である。

(10) 〈ウナギについて〉

F 「えー、骨がいっぱい入ってるからやだ。」

M 「確かにくさいってのはわかるけど、あの山椒かけるでしょう。」

F 「山椒とかあまり好きじゃないんだ、私。」 (名大)

(11) M 「どうして判るんだ」 (蛇蝎)

(12) F 「なべ買ってきて。」

M 「やだよ、なべ買っ。」

F 「あんなのだって1000円くらいだよ。」

M 「だから、買い行くのが面倒くさいの。」

F 「もう、えー、だっていつもパチスロ行ってんだから、そのついでになべ。」

M 「違う、いつもビデオレンタルに行ってるの。で、帰ってくる途中になぜかパチンコ屋があるから、気付くと入ってやってるって感じ。」 (名大)

もとより、「の」と「のだ」との違いは「だ」の有無にのみあるわけで、意味的にも働きの上でもきわめて近い。しかし、文末の「の」を「のだ」の異形態と考えると、文末の「の」の「のだ」とは異なる性質を見落す恐れがあるように思われる。たとえば、次の例のように、「の」を「のだ」に置き換えると、元の文とはニュアンスがかわり、すわりが悪い場合もある。

(13) F 「じゃあ、じゃあ、じゃあ、布団ちょうだいよ。」

M 「あげてるじゃん。」

F 「うーん、寒いの。」

M 「うるさいよ。寒いと思うから寒いんだよ。」 (名大)

(14) M1 「でも、L (他の男性) に抜かれてもそんな、大げがになってないもんね。」

M2 「でも。なんかね、抜かれたって言うよりも外されたって感じなんだって、Lのは。(ああ) あーあって。戻れ戻れとか言われとるが。(そうだっけ) そう。だから、ずーっとなるときあんの。(あるある) \*\*\*されとるね、あんときは。3度ぐらい抜かれとんの。でも、あれはLだけが悪いんじゃないけどね、ほんとに。フォワードが悪いんだよ、うちから\*見たら\*。\*\*\*あんだけうち\*\*\*。」

M1 「確かに出てない。」 (名大)

次の3節で、「の」と「のだ」の用法の違いを見ることにする。

### 3 「の」と「のだ」の違い

「の」は「のだ」の異形態として扱われることが多い(たとえば、野田(1997)、名嶋(2007))。田野村(1990)では、文末の「の」に「ノダ形式」以外のものもあることが示唆されているが、田野村はそうした「の」を終助詞と考えるべきか否かという観点から論じている。「のだ」の意味、用法については、すでに多くの論考があるが、「の」と「のだ」の用法の違いはどこにあるのだろうか。形の上からは、断定の有無ということになるが、その検討に入る前に、まず「だ」の働きを見ておきたい。

#### 3.1 文末の「だ」

文末の言い切りの「だ」は、話し言葉においては必ずしも義務的ではない。書き言葉において「XはYだ」という形は、「だ」によってXをYという事態のありようと結びつけるものだが、話し言葉で「だ」が用いられるときには、発話時の話し手の言表態度を表すモダリティ性が強い。以下は、話し言葉における「だ」の意味を分類したものである(三枝2001)。左側が意味分類、右側に用例を載せる。

〈自分自身に向けた発話〉

①感情の吐露 M 「もう、だめだ……」 (ひき逃げ)

- ②不満・非難 M「ざまあみろ、だ」
- ③発見 M1「何だよ、見せろよ。」 M2「ゲッ、トカゲだ！」(ひき逃げ)
- ④思い当たり F「あ、そうだ、ねえ、研究室行った？」 (しこ)  
〈他者に向けた発話〉
- ①主張 F「私、中年の人って好みなの。ねえ、栗山さん」  
M「栗原だ」 (オペラ)
- ②宣言 M「これは神聖なコンクールだ！」 (オペラ)
- ③命令 M「そのほかの者は、競技とおどりの練習だ」(ちびまるこ)
- ④疑問 M「年はいくつだ」 (蛇蝸)
- ⑤問い返し M「都合のいいこと言うんじゃねえよ！ 陸の王者だから  
陸王だあ？ 絶対慶応入れだあ？」 (ひき逃げ)

上の例に見るように、自分自身に向けた発話と、他者に向けた発話とで、「だ」の使い方に異なる点がある。〈自分自身に向けた発話〉は、男女とも共通に使いやすいが、〈他者に向けた発話〉は、主に男性によって使われ、女性は使いにくい。これは、歴史的に「だ」を使うことが男らしい言葉とされてきた社会通念の影響によるものと考えられる。

### 3.2 「の」にはない「のだ」の用法

文末の「のだ」も断定の「だ」を含む点で、言い切り形の「だ」と共通した用法も少なくない。たとえば、吉田(1988)は、「のだ」の用法を、換言、告白、教示、強調、決意、命令、発見、再認識、確認などに分類しており、「だ」の用法と共通するところも多い。

しかし、「の」「のだ」は、田野村(1990:5)で指摘されているように、「あることからの背後の事情を表す」のが基本的な機能で、この前提を必要とする点が、用言の言い切り形とは異なる。しかし、言い切りの「だ」も「のだ」も、聞き手に向けた発話と同時に、話し手自身に向けた独話的な発話での使用が可能である。一方、文末の「の。」には、基本的に独話的な用法がない。この点が「のだ」と「の」の大きな違いと言える。以下の用例(15)は野田(1993)、用例(16)は吉田(1988)のあげる例だが、いずれも「のだ」が示す意味では「の」

に置き換えられない。

- (15) 明日は会議があった {んだ・\*の}。  
(16) しまった！ 銀将は真横へは進めない {んだ・\*の}。

用例(15)(16)の「のだ」とも、話し手自身の独話的な気づきを表しているが、それは断定によって示される。(15)(16)で「明日は会議があったの。」「銀将は真横へは進めないの。」が成立するのは、疑問を表す場合か聞き手に教示する場合である。また、すでに三上(1953)が指摘している、次のような推測を表す陳述副詞「きっと」「たぶん」「たいてい」などがある場合もこれに近い例と考えられる。すなわち、次の例、「きっと」がある文では「の」で言い終わるのは不自然である。

- (17) あの人、来ないね。きっと忙しいんだ。 (野田1993)  
(18) ??あの人、来ないね。きっと忙しいの。 (野田1993)

(17)が自然で、(18)が不自然に感じる理由は、次のように考える。森山(1989:82)は、「かもしれない」「にちがいない」といった蓋然性判断の形式や「内容に対する話し手の評価・認識」を表す蓋然性を表す文修飾副詞も、「命題内容に対する話し手の固有のとらえ方を表すもの」であることを指摘している。森山は、こうした表現がなぜ疑問表現と共起しないか、すなわち「かもしれないか」が言えない理由について論じているが、ここでの議論は、文末の体言化の「の」にも当てはまると考えられる。すなわち「きっと」や「多分」は、推測ではあるがそれもまた話し手の1つの判断である表現を必要とするため、それに呼応する述語を必要とすると考えられる。次のように、「よ」「ね」といった聞き手目当ての終助詞があれば、終助詞は述語に対応する働きをするため、「の」による表現が可能となる。

- (19) あの人、来ないね。きっと忙しいのよ。 (野田1993)  
(20) あの人、来ないね。きっと忙しいのね。 (野田1993)

また、言い切りの形では「彼は、きっと来る。」が可能だが、これは、動詞の言い切り形がそれ自体モダリティ性を持ち得るからであろう。「あしたはきっと雨。」のように名詞だけになると、すなわち、述部にモダリティ性がないと、舌足らずな感じで不自然になる。

### 3.3 「のだ」にはない「の」の用法<sup>[註1]</sup>

先の3.2節で、文末の「の」は、話し手の断定を示さないため、聞き手目当ての発話でしか用いられないと述べたが、実は独話でも用いることが可能な次のような表現がある。

(21) 〈独話〉(魚かと思ったら)これ、草じゃないの。

本稿ではこのタイプの表現は、広くは疑問表現に含まれるもので、そのため「の」の接続が可能になっていると考える。まず、荘司(1992)が指摘するように、疑問文を作る際には、疑問語があること、次に、上昇調イントネーションを文末に置くことが基本で、疑問文において疑問助詞「カ」は必須要素ではない。このことは、「の」が疑問文を構成することからも容易に領ける。仁田(1991:147)は、「これが蟻地獄か。」といったタイプの表現を、「発話終了時には、不明な点が解消されている。疑問に対する待たれていた解決が見出されている」として〈自問納得〉と名付けている。用例(21)は、「草じゃないか」と、「か」には置き換えられるが、「のか」には置き換えられない。

- (22) a. これ、草じゃないの。  
b. これ、草じゃないか。  
c. これ、草じゃないのか。

用例(22c)のように「のか」を接続すると、「じゃない」は、「ではない」という断定の否定表現となり、用例(22a)の「じゃないの」とは異なる意味になってしまう。「じゃないか」「じゃないの」は音調の上でも一語化しており、話し手にいったんは疑いが生じていると考えられる点で、疑問表現の一種と考

える。

次に、「の」と「のだ」について、聞き手がいる場合に、どんな違いがあるかを考えてみたい。まず、前に来る述語が形容詞の場合を例にとって考えてみる。次は、高知の暑さについて述べたものだが、「です・ます体」で一貫してすすめられている発話が、形容詞を「の」で受ける部分(下線部)だけ普通体に変わる。

- (23) ……とにかくね、暑さが食いついてくるんですよ、もう 子どものころはね、高知で生まれ育ったんだから、わかってたはずなんだけども、もうやっぱり どころか あの夏を忘れてましたね、これね ○○さん(聞き手の名前)、夏が白いの 〈聞き手:「えっ」〉 もう、うん、お日様の光が強いから、白いですよ 夏が、こう、ほんとに (ラジオ)

「春は曙。」を「春は曙だ」といっても意味は変わらないが、体言による叙述と用言による叙述とは表現の勢いに違いがある。上の例を「夏が白いんだ」に置き換えることは可能だが、「夏が白いの」がもたらす緊迫感は感じられない。こうした語気の強さによってことがらを際立たせる点が、文末の「の」の1つの特徴と言える。こうした、ことがらを際立たせる必要は、ことがらを一つひとつ並べ立てて述べる場合、たとえば物事のプロセスを説明する場合や、話し手の気持ち、物事の有様を提示する場合に多いと考えられる。この点を料理の作り方を人に話す場合を例に考えてみる。以下は、「とうがんのくず煮」の作り方である。

- (24) 1 とうがんは、種とわたを取って一口大に切り、皮をむく。  
2 鍋に薄口しょうゆ、みりん、だしととうがんを入れ、15～20分、ゆっくり煮含める。  
3 水どき片栗粉をまわし入れて、とろみをつけ、器に盛る。

この作り方を、会話しながら人に伝える場合、次のような言い方が可能である。

(25) とうがんを、種とわたを取って一口大に切り、皮をむく {の・?んだ}。  
それから、鍋に薄口しょうゆ、みりん、だしととうがんを入れ、15～  
20分、ゆっくり煮含める {の・?んだ}。それで最後に水どき片栗粉を  
まわし入れて、とろみをつけ、器に盛る {の・んだ}。

「のだ」で言い終わることは、最後の文では可能だが、一つひとつの文すべてに「のだ」を使うのは不自然だろう。ここでは、「の」の体言化によってことがらが切り出されて示されている。こうした用法は、モダリティ性のない「の」だからこそ可能になると思われる。これにつながる用法として、「の」の体言化によって抽象化、一般化が強く示されている以下のような用法がある。

(26) <母親にパンの耳に栄養があるから食べるように言われて>  
娘 「パンの耳に栄養なんて!!」  
息子「ねえ一つの!!」 (あたし)  
(27) F 「バカだよ、だって、やめなちゅうの。」 (男性1045S)

「一つの・ちゅうの」は、「と言うの」と同義と考えられる。話し手は、自分の主張を「と言う」によって一般化している。「の」にストレスが置かれることから、「の」によってその一般化が強く主張され、「って言うんだ」のモダリティ性とは異なるものになる。次の例も、「のだ」に言い換えると説明的な意味合いが変わる。

(28) F 「私、中年の人って好みなの。ねえ、栗山さん」  
M 「栗原 {だ・なの・\*なんだ}」 (オペラ)

次のような禁止の「の」も、用例 (30) のように「のだ」に言い換えると教え諭すようで、禁止を表さなくなる。

(29) 若い人は遠慮しないの (蛇蝎)  
(30) 若い人は遠慮しないんだ。

以下の、「ます・です」に「の」が付加する場合 (用例 (31)) や「の」が2つ重なる例 (用例 (32)) は、「のだ」に置き換えることができないため、終助詞か否かという観点から議論されることが多いが、本稿では、単純に「の」による体言化と考える。

(31) それにたぶんそのお手紙は、わたくしや他の家族の者には、まったく関係のないものではない、そんな気がいたしますの。 (耳)  
(32) 23日なんかに宮崎に行って、27に帰って来るんだったの。 (女性410)

用例 (32) において、はじめの「の」はいわゆる「ノダ」形式、後の「の」は体言化によってことがらがとりまとめられていると考える。

本節のはじめで、形容詞「白い」に「の」が接続する例を見た。ところで、形容詞に「の」が接続する例では、慣用化した表現として「へんなの」「つまらないの」「うるせえの」「めんどくせえの」といった例がある。これらの形容詞の用例は、聞き手がいない場合にも発話される点で特異である。どれも否定的な意味を持つ点が共通するので、「おまえ、うるさいの」といった、もともとは他者向けの発話が感嘆詞的に固定化したものとする。

## 4 話し言葉における「の」の使用

最後に、「の」「のだ」が会話においてどのように使われているかを見ておきたい。話し言葉のデータとして、現代日本語研究会『女性のことば・職場編』(1987)と『男性のことば・職場編』(2002)を用いた。発話データ数は、『女性編』が11,421、『男性編』が11,099で、合計22,620である。

表1に、話し言葉における言い切りの「の」「のだ」「のです」とそれぞれに終助詞(「よ」「ね」「よね」に限定)が接続する場合の使用頻度を示した。実際には、言い切りの「のだ」という形は1例もなく、「のです」も2例あるのみで、「んだ」「んです」が使われている。また、「のだ」は、「のだった」という活用が可能だが、「んだった」は2例だった。

表1 「の」「のだ」「のです」の使用頻度

	の。	んだ。	んです。
男性	89	35	67
女性	195	50	46
計	284	85	113
	の+終助詞	んだ+終助詞	んです+終助詞
男性	22	107	195
女性	117	57	119
計	139	164	314
合計	423	249	427

表1から、言い切りの形では「の」の使用が多いことがわかる。男女別に見てみると、「の」は、男性が約30%、女性が約70%と、女性の使用頻度が際だって高い。「んだ」と「んです」についてはそれほど大きな使用頻度の違いはない。ただ、「んだ」では、女性の方が男性よりむしろ使用頻度が高く、「んです」では、男性の方が女性より使用頻度が高かった。終助詞が接続すると「んです」の頻度が際だって高くなり、丁寧化の「です」が対的に用いられていることがわかる。表2は、「の」の、平叙文と疑問詞のある文における使用頻度を示している。『職場編』のデータでは、平叙文と上昇イントネーションの文とは区別されている。表2中の疑問詞のある平叙文とは次のようなものを指す。

(33) えー、なんでいけないの。(女性1219)

上昇イントネーションの疑問文においても、「の」の使用頻度は、男性より女性の方が高いが、男女による大きな差はない。従来から平叙文の「の」の使用は女性に多く、「の？」は男女とも用いられると言われてきたが、今回のデータもそれを裏付けた。

全体としては、「の。」の使用頻度が高いこと、言い切りの「んだ」「んです」の使用頻度は高くないが、終助詞が接続した場合には「んです」の使用頻度が

表2 平叙文と疑問文における「の」の使用頻度

	男性	女性
平叙文	89	195
疑問詞のある平叙文	6	19
疑問文（上昇イントネーション）	128	148
計	134	167
合計	223	362

高くなり、対的に使われることがわかる。

## 5 文末の「の」と終助詞

従来、文末の「の」は「のだ」の異形態、「のだ」の省略形ととらえることが多いため、文末の「の」と終助詞との境が問題にされてきた。しかし、本稿では、文末の「の」は叙述を体言化するもので、聞き手目当てのモダリティは持ち得ず、あくまで「の」に終助詞が下接すると考える。

(34) ライスはフォークの背にのせるって昔 言ってたけど ありゃ ウソ  
だってね!? これが正しいのよね!? ね、お父さん (あたし)

用例(34)を「の」で言い終わるのは不自然で、終助詞を必要とする。終助詞の持つ聞き手目当てのモダリティは、「の」は持たないと考える。

## 6 まとめと今後の課題

本稿では、言い切りの「の」の働きについて考えた。文末の「の」は、「のだ」と共通した使われ方もする。しかし、言い切りの「の」の機能は、断定を伴わない体言化の働きによって「事態をひとまとめのものとして把握すること」にあるので、話し手は発話時の気持ちのあり方をそこに盛り込むことができる。具体的な用法として、たとえば、「のだ」にはない疑問や禁止、また、ことが

らのプロセスを並べ立てたり、話し手の気持ち、物事の有様を強く提示する、あるいはまた、単にことがらをとりまとめるといった用法を持つ。

方言によっては、「行くだあよ。」「あいつは、こまかいことにうるせえだ。」のように叙述に直接「だ」が下接し、「の」が使われない表現も見られるが、文末の「の」は、その用法の広さから、共通語においては、用言の言い切り形と同じように、叙述の基本的な形の1つと考えられる。

本稿では、文末の「の」の比較の対象として、「のだ」「のです」しか扱わなかったが、「のだ」は文中で使われることも多く、文全体の中で、「のだ」「の」さらに「か」の働きを考えることを今後の課題としたい。

〈一橋大学〉

## 注

[注1] …… 文末の「の」に関して、「7年ぶりだわ、柿沢さんてよばれたの」のようなものは、除く。

## 参考文献

- 尾上圭介 (2001) 「そこにすわる！」表現の構造と文法『文法と意味 I』pp.100-107. くろしお出版 (原論文は『言語』8(5) 大修館書店 1979)
- 三枝令子 (2001) 「だ」が使われるとき『一橋大学留学生センター紀要』4, pp.3-17. 一橋大学留学生センター
- 荘司育子 (1992) 「疑問文の成立に関する一考察—「デス」という形式をめぐる」『日本語・日本文化研究』2, pp.39-50. 大阪外国語大学
- 荘司育子 (1993) 「疑問表現における文末の「ノ」」『STUDIUM』20, pp.1-13. 大阪外国語大学大学院
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 名嶋義直 (2002) 「文末のノ」に関する試案『ことばの科学』15, pp.65-89. 名古屋大学言語文化部言語文化研究会
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能 関連性理論の観点から』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田春美 (1993) 「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる『日本語学』12(11), pp.43-50.
- 野田春美 (1995) 「～ノカ?、～ノ?、～カ?、～φ?—質問文の文末の形」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』pp.210-219. くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』くろしお出版

- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』pp.57-120. くろしお出版
- 森山卓郎 (1992) 「疑問型情報受容文をめぐる」『語文』59, pp.35-44. 大阪大学文学部国文学研究室
- 吉田茂晃 (1988) 「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15, pp.46-56. 神戸大学文学部国語国文学会
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房

## 【例文出典】 下記以外は作例

朝日：朝日新聞2001.3.24、あたし：けらえいこ『あたしんち②』メディアファクトリー、オペラ：赤川次郎『三毛猫ホームズの歌劇場』角川書店、しこ：砂本量・水谷俊之「シコふんじゃった」『'92年鑑代表シナリオ集』映人社、女性：『女性のことば・職場編』(1987) 現代日本語研究会、蛇蝎：向田邦子『蛇蝎のごとく』大和書房、男性：『男性のことば・職場編』(2002) 現代日本語研究会、ちびまるこ：さくらもも子『ちびまる子ちゃん 大野君と杉山君』ホーム社、ひき逃げ：周防正行「ひき逃げファミリー」『'93年鑑代表シナリオ集』映人社、耳：内田康夫『耳なし芳一からの手紙』徳間文庫、名大：名大会話コーパス、ラジオ：山本一力「ラジオ深夜便」2010.8.31